
月光遥

ソナチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光遥

【Nコード】

N7073S

【作者名】

ソナチネ

【あらすじ】

ずっと想いつづけてきた相手に告白しようとして試みる露梨。そしてそんな露梨を応援する、幼馴染の楓菜。だがしかし、そんな矢先に露梨が病気にかかってしまう。病気で不自由になりゆく体。近づくと余命。そんな中で告白なんてできないと自暴自棄になる露梨。そんな露梨に寄り添いながらも戸惑う楓菜・・・淡くて脆い命と想い、思い。私の考えるなりに、全力で描きました。読んでみてください

夜の出来事

乱視でぼやけたオリオン座は今日も煌々と光輝いている。

冬の寒空のプラネタリウムには、何か惹かれるものがある。凍えそうな寒さでも、その凜とした夜の風の中で白く輝く星々にあたたかい眼差しを感じた。

楓菜^{ふうな}は微笑まずにはいらなかった。元気をくれてるような、力強い気持ち^{こころ}が心にすっととけていく。

そうやって家にたどり着いた日には、楓菜は必ずぐっすりと眠れているのだった。

深夜三時

キツとドアの軋む音が楓菜の霧^{もぎ}がかかった視界に射し込んだ。陽のあたる縁側でまどろむ猫のように、布団の中で楓菜はうにゃ、と小さく鳴いた。

数秒の間があった。楓菜は目を細めて漆黒の人影を音もなく見つめた。闇夜を司る者の息づかいしか聞こえない。

「誰？」

闇の中に楓菜は戸惑いがちに問いかけた。

「あたしやあたし。」

「つ、露梨^{つゆり}？」

電気をつけることも忘れて楓菜はじつと露梨を見つめていた。

「どこから入ってこれたん？」

枕で顔を隠しながら楓菜は露梨に小さく手招きした。

「だから不審者ちやうて。普通に玄関から入ったし。」

「なんちゆう威勢のええ不審者や。あんた才能あんで。」

「これでドラマみたいに銃パンパン鳴らしながら入ってきたらかつこええねんけど…そやから不審者ちやうゆってんねん」

「ここ人ん家なこと知ってるやんな？」

「楓ちゃんいるしな。そらそやわ。」

お前はサンタクローズかつ、と今更ながらツッコみたくなるのを我慢して、楓菜は露梨を軽く睨んだ。

「すみません、ここに住居不法侵入者が一名。」

「あかんあかん、警察に電話すんのはあかん。」

露梨は楓菜の手から子機をもぎ取って、そつと元の場所へ戻した。

「ちゃんと合鍵で入ってきたんもん。」

露梨が指で摘まんで鍵を揺すった。シャラシャラ鳴りながら小さく鈍く光った。

「合鍵って中学生がこんな夜中に使うもんちゃうやろ。」

「そやけど、窓ガラス割るとかそんなタチ悪いことされるよりはええやろ。」

「あんななあ」

「まあ長い付き合いやねんし許してえなあ。あたしは歌本家は半分樋ノ水家やて思てるから。」

確かに楓菜と露梨は家族ぐるみの仲である幼馴染だ。しかし、なぜこの時間帯に楓菜を誘いに来たのか。それが問題だ。

「なあ露梨。」

「うん？」

「なんでこんな時間にあたしの家に来たん？」

「ううん…」

顎のしたに親指と人差し指で支えを作るこの仕草。露梨の考え込むときの癖だ。楓菜は思わずすっこけそうになった。

「ううん、って何それ。あんなんの考えもなしにわざわざここに

「忍び込んでくれたん？」

「そうやで。ほら、ちゃんとお土産も持ってるし。」

確かにポケットから出した手には、ミルクキャンディーが七つ乗っかってた。

「な、偉いやろ？」

「いやいやいや、夜に人ん家になんの躊躇いもなく忍び込む人なんか誉められへんし。」

つい普段通りの声を出してしまった楓菜は慌てて口元を押さえた。

「誰もいいひんし大丈夫やで楓菜。」

「わかんらんで。お兄ちゃんと飛有楽はむっちゃ耳ええから。」

「あ、そっか。そっやんな。」

「この前もな、あたしが静かぁに部屋でゲームしてたのに飛有楽に見つかってしもてんか。」

「うっわ、凄いだ獄耳やなほんま。そやけどさ、ひゅっくんの部屋はあっちやろ。」

「うん、そやねんけど…っつて、あんなあ露梨。あなたほんまに何しに来たん？」

「えっとな…」

言いながら、露梨は持って来たミルクキャンディーの包み紙を一つ剥がした。微かに震える小さな露梨の指を、楓菜は見つめていた。

「露梨、やるか？」

包み紙の端を掴もうとした楓菜の手を、露梨ははらった。

「大丈夫やで楓菜。うちゅうかこれぐらい自分でできなあかんしな」

そう言って再び包み紙を剥がし始めた。

露梨の横顔に涙が滲んでいるのを楓菜は知らぬふりをするしかなかった。そんな自分が楓菜は惨めで卑屈で恥ずかしかった。

飴と参考書

あその後、露梨は結局何も教えてくれなかった。

気がつけば楓菜と露梨は、布団もきず、お互いに肩を寄せあって眠っていたようだった。

先に目が覚めた楓菜は、あまりの寒さに思わず身震いした。時計の針がちょうど、3時20分を指していた。

喉が乾き過ぎていた。口がきちんと閉じていた気がしない。楓菜はレモンの飴を一粒口に入れた。そういえば、せつかく深夜に起きたのだ。いつものように一個だけでは楓菜はなんだか癢かゆな気がした。もう一度、飴の袋を指だけで探った。なんの躊躇ちゆうちゆうもなく出てきたのは、少しくたびれたブドウ飴だった。

楓菜はそれをポケットに突っ込んで、一階を後にした。

忍び足で冷たい階段を上るのは、普段寝る前と変わらないことなのに、なぜか今日は不思議な気分だ。

凜とした爽やかな明け方の匂いの中に自分がいるのは不自然な気がした。頭が重くて、今にも後ろに倒れてしまいそうな気がした。

早起きすると、妙な意欲が出てくるのは楓菜の気のせいだろうか。楓菜は英語の参考書を探した。だが、なにしろ楓菜の部屋だ。机や床には物が散乱しすぎている。

やっと探し終えた時には目標のスタート時間を大幅に上まっていた。目次を見ながら、楓菜は苦手な不定詞だけにしぼことにした。

2・3ページは意外にも軽快に進み、楓菜は次のページをめくった。

と、そのページに四つ折のメモ用紙が挟まっていた。タルトやマカロンなど、お菓子の絵がパステルなタッチで描かれた、可愛いらしい物だった。

「こんなん入れたっけ？」

楓菜は首を傾げながら、中を開いた。そして、楓菜は驚愕した。

「なんで時織はなんも気づいてくれへんのかな・・・」

時織といえば、楓菜たちの同学年の男子だ。楓菜はもちろんこの名を書いた覚えはなかった。

「これ、あたしのちゃうやんっ」

楓菜は慌てて本を裏向きにした。そこにはローマ字で小さく「T S u y u r i」と書かれていた。

壊されし眠り姫のまどろみ

「なんで…これ、あたし何でまちごおて…」

そつと露梨の寝息を確認し、楓菜は四つ折りの紙を開けた。紙のこすれる音ひとつで露梨が目を覚ますことを考えると、楓菜の心臓は急に勢いよく高鳴った。

慎重に慎重に、ゆっくり開けていくのはかなり気が滅入る作業だった。約二分を費やした紙の中身は、日記のような文だった。挿絵はひとつもなく、露梨の書く小さな丸文字がびっしり書いてあった。露梨は文章を書くのが好きなことを、楓菜は今更のように思い出した。

「12/7 時織ときおりと久しぶりに隣の席になれた やっぱめっちゃ嬉

しい(*^ ^*)v

こんなん誰にもゆわれへんねんけどな。

せやけど、やっぱもつと時織に素直になりたいな。

ずつと幼馴染でちっちゃい頃から一緒に遊んできてたんやん。

せやのになんか…最近あかんねんなあ。絶対きつい言葉ゆうてまうもん。

ちっちゃい頃みたいにもつと素直になりたい。あたし絶対、嫌なやつちやなあつて思われてるもん」

楓菜は愕然とした。

親友である露梨にこの事実を秘密にされていたのが悲しいのではない。空しいのではない。また、ともに幼馴染みである時織を同じように懂れていたわけでもない。

紙が放り込まれていた環境とは到底結びつけられない、露梨の思いが、苦しさが、滝のような鋭さで、一本筋になって楓菜に浴びせかかってきたのだ。

英語の参考書に四つ折りにされていただけの紙。こんなありふれた、見慣れた場所にある紙が、こんなにも大切なものなことを楓菜は理解できていなかった。

たかが参考書にある紙だ。しかも、間違えたとはいえ、家族ぐるみの付き合いがある幼馴染みの親友の持ち物だ。少しぐらい、盗み見ても何も起こらないだろう。

そのはずだった。

それを軽々しく、たいした罪悪感も持たずに内心で昂る好奇心に、楓菜は負けていた。いや、戦う気なんてさらさら無かった。その感情に、なんの意義も疑問も起こることなく、楓菜は故意に開けていた。そのことが腹立たしかったのだ。

遠くなったオリオン座

楓菜はしばらくの間、紙を見つめることしかできなかった。

視線は四つ折の線を何度も何度もたどっていた。単純な十字路なのに、そこを迷い子のように行ったり来たり。

今の楓菜には、そんなことでしか気を紛らわすことはできなかった。

この罪悪感は、そんな単純なもので惑わされる自分を軽蔑することで、消せる気がした。

軽蔑して、突き放した自分の影。今度はそれを踏みにじる。抗おうと怯える影の手を、足を、容赦なく。

それは、今の自分への戒めで。そして皮肉ながら、癒しにもなっていた。

露梨は恋愛に素直でないし、奥手だった。「好きな人」の存在を、楓菜は尋ねられたことも、露梨自身から打ち明けられたこともなかった。露梨はそういうことを興味本意で強引に詮索すること、知られることは嫌いなのだ。

だからそれを破らずに今までいた。

興味本意の反則は、無意識の内に底の方に沈んでいた。

知らなくたって、きかなくたって、二人は大親友でいられたのだ。
幼なじみの大親友でいられてきた。

今のこの事実を露梨が知ったら、露梨はどうするだろうと楓菜は考えた。

切羽詰まった状況だ。

こんなにも切羽詰まった状況なのだ。

だが楓菜の視界が熱く霞むことはなかった。

寒さのせいではない冷えた体に、出所知れずのただただ重苦しいものはせり上がる。

遠くなったオリオン座に、楓菜はため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073s/>

月光遥

2011年10月7日19時26分発行